日本建築学会大会学術講演梗概集
(北海道) 2004年8月

福岡県京築地区における神楽舞台の研究
その1　神楽舞台の概要

正会員　○ 井上英孝 *1
同　河野泰治 *2
同　岡田知子 *3
同　柴田加奈子 *4

神楽舞台　拝殿　神楽殿　神楽講　豊前岩戸神楽

はじめに　研究の目的と背景

福岡県の東部に位置する京築地区(2市7町2村)には(図1-1参照)、神楽舞台が濃密に現存・分布していて、200棟以上にのぼるとみられている。この地区では、中世以来の伝統をもつといわれる豊前神楽、通称豊前岩戸神楽が多くの集落の神社境内で毎年奉納されている。神楽は、舞人・囃子方で構成される神楽講と見物人・世話人、及び舞台の三要素で成り立っている。同地区の神楽講についてはその沿革や組織、演目、活動状況や衣装等について詳細な実態調査・記録が行われ[1]、平成11年に福岡県重要伝統無形文化財に指定された。しかし、伝統芸能としての神楽舞いに注目が集まりつつある中で、神楽舞台の平面形や規模など建築的な実態は全く等閑視されている。

本研究では、この京築地区の神楽舞台をとりあげて、その建築的な形態・特徴を明らかにすることを目的にする。本報告と続報では、これまでの神楽舞台の調査・研究での成果をおさえたうえで、調査対象地域が広域で、かつ舞台数も多いことから、京築地区の南に位置する豊前市を中心に，北端の苅田町と両地域の中間にある豊津町を加えた3つの行政区域における神楽舞台の配置、平面構成、規模等について考察する。

1 神楽舞台についての既往研究

神楽舞台としての拝殿・神楽殿に関する研究には大きく2つの系統がみられる。ひとつは、神楽研究の一部分として扱ったものである。「神楽研究」[2]は、舞台の配置と舞台形式について触れている。「西日本諸神楽の研究」[3]では、里神楽の発展過程と神楽の内容（形態）による神楽組（講）の分布を明らかにすることに主眼をおいたものである。いずれの研究にも舞台の平面構成や規模等の考察はみられない。

もう1つの研究の流れは，農村舞台に関する研究群であるが、歌舞伎舞台と人形芝居が演じられる舞台を主対象としたもので，神楽舞台については，生成過程や配置形式の考察にとどまっている。「日本農村舞台の研究」[4]は、その調査対象の大多数は歌舞伎舞台である。神楽に関しては、その舞台には拝殿・神楽殿系があり，拝殿系舞台成立過程を6段階に分け、神殿の発生・成立、拝殿系建築の発生を経て、拝礼の場より芸能の場としての性格が与えられ、楽屋構・客席構の発生の最終段階に至っているとしている。「野の舞台」[5]でも歌舞伎・人形舞台について主に考察されているが、神楽舞台を神社本殿との位置関係でその配置形式を6分類している。この配置形式の模式図は本報告での3分類に包含される。他にも、「農村舞台」に関する調査・研究報告は少なくないが、常設の神楽舞台を対象とするものはほとんど見出せない[6]。

2．豊前岩戸神楽（京築地区と豊前市、豊津町、苅田町）

2．1．調査・対象地区

京築地区は西南の英彦山（1200m）から扇状に東の周防灘に広がり、北部の行橋市周辺にやや広い平野を形成している。地区面積約565km2、人口19万人ほどである。近代以前の京都・仲津（京都）と築城・上毛（築上）の4郡が行橋市・京都郡と豊前市・築上郡に編成されている（図1-1)。南部の豊前市は3万人ほど、面積111ｋｍ2と広く求菩提山（782ｍ)、犬ｶﾞ岳からの小河川筋の集落と周防灘に面する平野部とで構成されている。また、京都郡苅田町は北九州市に接した人口3万余、面積46km2で、海沿いに工業地帯を擁している。京都郡豊津町は京築地区のほぼ中央、人口1万人弱、面積19km2と狭域である。

調査は2000年1月から、境内の配置、舞台寸法の測定、写真撮影と神楽見学、一部神官・講・住民のヒヤリング及び資料収集を行った．調査対象舞台数は、舞台内部が不明な豊前市の一例を除いた既存の豊前57、苅田19、豊津19である。

2．2．神楽と講

豊前岩戸神楽の起源は早くて15，6世紀からと推定されている[7]。明治初年に社家神楽の奉納が排された後、早くも明治7年ころから里神楽として伝承・復活している。

その特徴は、祓いの採物神楽と演劇的要素の強い出雲系神楽、湯立てを行う伊勢系神楽に太神楽の混合した芸能である。加えて英彦山・求菩提山などでの豊前修験道の影響がみられる点にあるとされている。「京築地域神楽講の実態調査」(95年版)によると、100の神楽講が確認され採録されているが、活動中のものは半数の50、復活中2となっている。豊前市域では8講、豊津町5講、苅田町2講が採録されているが、活動中のものは豊前5講とひとつの保存会、豊津1講、苅田ではひとつの講で奏楽だけが継続されている。

3．豊前市・豊津町・苅田町の神楽舞台

3．1．概要と配置形式

神楽舞台は、神楽奉納を拝殿で行うもの（拝殿式舞台）と拝殿以外の舞殿・神楽殿(神楽殿式舞台)に2分される(図1-2に拝殿式舞台例を示す)。

この神楽舞台と本殿、楽屋との配置形式を既往研究を参照しつつ類型化したのが図1-3である。

A Study on Kagura-stages in Keichiku, Fukuoka Prefecture　Part 1　An Outline of Kagura-stages

INOUE Hidetaka, KAWANO Yasuharu, OKADA Tomoko, SHIBATA Kanako

NII Electronic Library Service

まず、拝殿式舞台は、本殿とのつながりから、2つに分けられる。ひとつは、本殿と連結している型、つまり、幣殿をはさんだものや一体となっているもの、あるいは、本殿と床面が連続しているものを（A. 本殿・拝殿連結型）とする。これは本殿側から拝殿での神楽を見物できない形式である．他は本殿と別棟となっている型（B. 本殿・拝殿別棟型）である。次に楽屋との関係である。楽屋を舞台空間の一方を間仕切壁で区切った型（1. 付属型）と別棟になっていて橋懸りで連結されている型（2. 別棟型）、及び舞台平面に楽屋が画定されてなく楽屋棟も持たない型（3. なし）に区分できる。

舞台形式は、3地域とも神楽殿式は少なく、大半は拝殿式である．豊前市域でのそれは、「B. 本殿・拝殿別棟型」がやや多いのに対して、豊前と苅田の中間に位置する豊津では「A. 本殿・拝殿連結型」が大半を占め、苅田では、1例を除いて「A. 本殿・拝殿連結型」に集中している。また、楽屋形式も全く異なり、豊前では「1. 付属型」が多く、次いで「2. 別棟型」も少なくなく、「3. 楽屋なし」は1例に過ぎないのに比し、苅田町では楽屋のない舞台が大勢を占めている。一方、豊津では1例を除いて「3. 楽屋なし」に集中している。つまり3地域での特徴的な差異は、「本殿・拝殿が別棟になっていて、楽屋が拝殿の一隅を占めている形式」が豊前市では最も多いものの、他の本殿・拝殿連結型、楽屋別棟型なども一定数みられ多様である。これに対し、苅田町と豊津町では対比的に「本殿・拝殿が連結していて、楽屋の区画がない形式」が大勢を占めているが、「本殿・拝殿連結型」は苅田町の方により集中し、他方、「楽屋の区画がない形式」は豊津町の方により集中している。このことは、3地域における本殿と拝殿との異なる接続形式の分布状況の違い、及び楽屋空間の分化程度の違い、という異なった2つの次元の違いとみてとれる。その背景は今後の課題である。

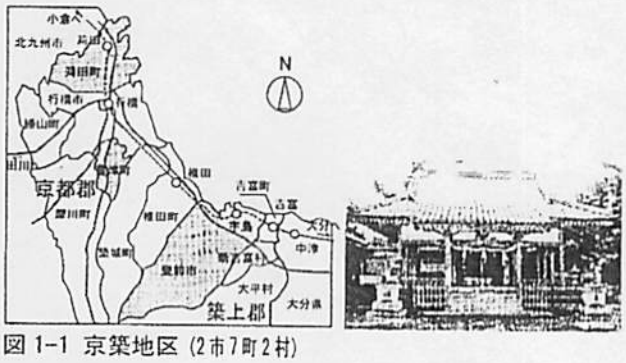


図 1-1 京築地区（2市7町2村）

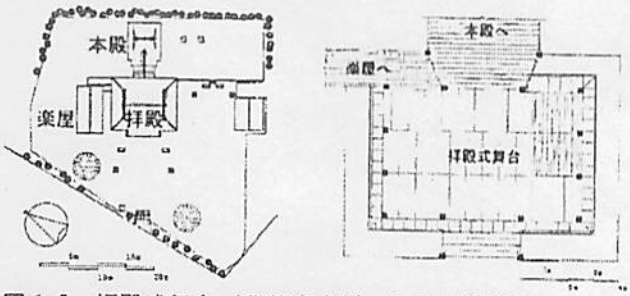


図 1-2 拝殿式舞台（豊前市中村、角田八幡神社）

まとめ

豊前市を主対象に苅田町、豊津町を加えて、福岡県京築地区における農村舞台の一種である神楽舞台をとりあげ、これまでの調査・研究成果を基に神楽講や舞台の配置形式について概略を示した。京築地区南部の旧上毛・築上郡の豊前市、北端の旧京都郡の苅田町、中央部の旧仲津郡の豊津町の3地域における神楽舞台の配置形式には明らかな差異がみられ、神楽としては「豊前岩戸神楽」の地区として一括されているものの、その舞台は一様でないことが明らかとなった。すでにいくつかの他町村での調査を進めているが、京築全域での差異の流れ、特徴が見え出した程度である。神社境内も含めて地域の環境・生活資産とする視点や地域社会・組織との関わりにも注目して考察を進めたい。

なお、調査には元久留米工業大学院生の河内正一・嶋田靖彦両氏、元福岡大学生の古川主税・神野大輔両氏及び元西日本工業大学生の鈴木良平、小田英子、中川真治3氏の協力を得た。謝して記す。

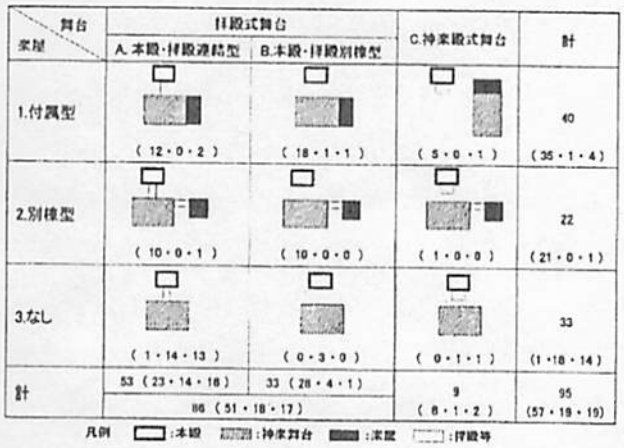


図 1-3 神楽舞台の配置形式と舞台数（豊前市・豊津町・苅田町）

注

1) 神楽の里づくり構想推進協議会・京築地区神楽調査委員会、「豊前岩戸神楽ー福岡県京築地域神楽講の実態調査」、1996
2) 西角井正慶、「神楽研究」、任生書院、1934
3) 石塚尊俊、「西日本諸神楽の研究」、慶友社、1979
4) 松崎茂、「日本農村舞台の研究」、同工学博士論文刊行会、1967
5) 竹内芳太郎、「野の舞台」、ドメス出版、1981
6) 研究の流れには、無論、日本建築史研究が位置づけられる。西和夫、「建築史研究の新視点二」、中央公論美術出版、2000では、仮設舞台の考察が加えられている（pp. 105-138）。
阿波のまちなみ研究会、「阿波の農村舞台」、平成4年。川上光洋、川向正人、「阿波の農村舞台における空間転換とその仕掛けに関する研究」、日本建築学会計画系論文集、2001年6月。角田一郎、「農村舞台の総合的研究、歌舞伎、人形芝居を中心に」、樓楓社、1971等。
7) 豊前岩戸神楽の歴史・概要は主に下記の文献によった。豊前市中央相撲委員会編、「豊前市史下巻」、豊前市、1991及び前掲注1)。
8) ヒヤリングでは既に衰滅も途絶えているが、今年からひとつの神楽講が復活中である。また神楽の里づくり構想推進協議会、「京築お神楽百科」には、創作神楽の同好会が97年に活動を始め町内の1社で奉納しているとしている（p. 6）。

*1 東和大学　教授・工修
*2 福岡大学　教授・工博
*3 西日本工業大学　助教授・博士（学術）
*4 同　研究生

*1 Prof., Tohwa University, Ma. Eng
*2 Prof., Fukuoka University, Dr. Eng
*3 Assoc. Prof., Nishinippon Institute of Technology, Ph. D.
*4 Researcher, Nishinippon Institute of Technology

NII-Electronic Library Service

日本建築学会大会学術講演梗概集
（北海道） 2004年8月

福岡県京築地区の神楽舞台の研究
その2　神楽舞台と神楽奉納

正会員　○柴田　加奈子*1
同　　岡田　知子*2
同　　井上　英孝*3
同　　河野　泰治*4

神楽舞台　　楽屋　　神楽奉納　　福岡県　　京築地区

はじめに

本報では、神楽奉納時の神楽舞台の使われ方からその機能や役割を考察する。

1．調査の方法

地図と既存資料により現存する全ての神社を対象に以下の手順で調査を実施した。

・神楽舞台の有無をヒアリングで確認
・神楽舞台が存在するもの全てについて実測調査
・神楽舞台での神楽奉納時の観察調査

2．神楽舞台と楽屋

2.1　神楽舞台の形状

神楽舞台は数本の柱で支えられた開放的なものが大半であるが、平時は格子戸等で閉鎖されているものや近年にアルミサッシをつけたものもみられる。（豊前市9、豊津7、苅田1）柱寸法は120mm角～200mm角、多いのは150mm　角前後であるが、丸柱のものも少数みられる。四方吹抜けの舞台から三方、二方、一方だけ吹抜けと多様であるが、四方から見物できる形式のものは見い出せない。

舞台の床高は500mm　～1200mm　程度と幅がある。

屋根形状は平入り入母屋が大半であるが、簡素な切妻のものや妻入りのものも見られる。床は畳敷き1例を除いて他は板敷きであり、畳敷きの舞台も奉納時には畳上げをする。

舞台の方位は本殿との位置関係で決まり、本殿の方位は周辺の地形に規定されるので、絶対方位という観点からみれば一様でない。

写真1. 常時開放されている舞台　写真2. 平時閉鎖している舞台

2.2　楽屋

楽屋は前報にもあるように舞台の一隅を使う付属型と別棟型がある。別棟型は写真3のように舞台と楽屋をつなぐ橋懸りのあるものが大半で、橋懸りのない別棟型は豊前の4件、苅田の1件のみである。楽屋は講の舞方・囃子方が着替えたり休憩したりする場所に使われ、毛頭・面・烏帽子などの被物や衣装、御幣・鈴・扇・太刀などの持物の置き場を兼ねている。多くの場合、奉納の様子がうかがえる場所にある。楽屋の外周は壁面となっているものが大半であるが、1面あるいは2面を開放している例もみられる。また楽屋の中に暖をとるための火鉢や囲炉裏があるものや、さらに区画して倉庫を設けているもの、外部と直結した出入口を設けているものもみられる。付属型について楽屋の面積をみると6㎡～24㎡と幅はあるが、大半は10～14㎡の程度の広さである。付属型の場合、写真4.のように柱間1間もしくは2間分を舞台との隔壁にして他の1間が開放されて、舞台と往来できる形式のものが多いが、全面（2間あるいは3間）を開放しているものも少なくない。

↑写真3.　別棟型（橋懸りあり）

写真4.　付属型（一部開放）→

3．神楽奉納の様子

図2-1は舞台がどのように使われるか、奉納時の様子を示したものである。いずれも豊前の例である。神楽奉納は舞台の規模、神楽の演目によってその形式は多様である。奉納場所はNO.11やNO.52のように拝殿の舞台だけを使う場合や、NO.30のように演目によっては境内に縄を張って空間を仕切った野外でも執りおこなわれる場合がある。お囃子は囃子座を有してない神社では舞方と同じ舞台上の楽屋に近い場所に着座している。舞台の多くは、本殿に向かう幣殿以外は平時から開放されている。しかし、NO.30のように平時は建具で閉鎖されていて神楽などの祭事の時には開放されるようになっているケースもみられる。ここでは建具は蔀戸になっているが引き違いの場合もあり、簡単

A Study on Kagura-Stages in Keichiku, Fukuoka Prefecture
Part 2 Kagura-Stages and Dedicatory Kagura Performances

SHIBATA Kanako, OKADA Tomoko, INOUE Hidetaka, KAWANO Yasuharu,

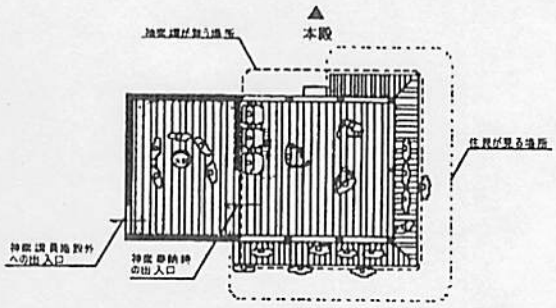
NII-Electronic Library Service

に解放できるようである。使い方をみると囃子方の座る一辺を残し３方向に開放される。奉納時は集落の人々はもちろん誰でも見物ができる。その場合、NO.11のように舞台そのものがある程度広い場合やNO.52のように大床（濡れ縁）がある場合は見物人も舞方と同じ舞台に着座して見ることができる。NO.30のように舞台の面積が小規模であったり大床もない場合は舞台の周囲で立ち見となる。演目によっては舞いの中で見物人は祓いを受ける。神楽奉納は大半午後から始まり演目の多い神社では翌日の未明まで奉納される。

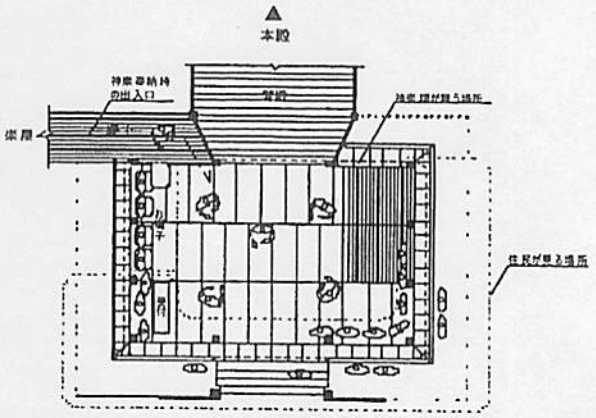
←写真5. 野外での演目

↓写真6. 見物の様子

右舞台上/左舞台の周囲



No.52



No. 1

おわりに

神楽舞台の規模や形式、神楽の演目、奉納する神楽講によってそこでの使われ方は多様である。今回は神楽奉納が最も盛んな豊前市の例を取り上げたが、今後は他の地区の事例を増やし、それぞれの特徴を明らかにしたい。

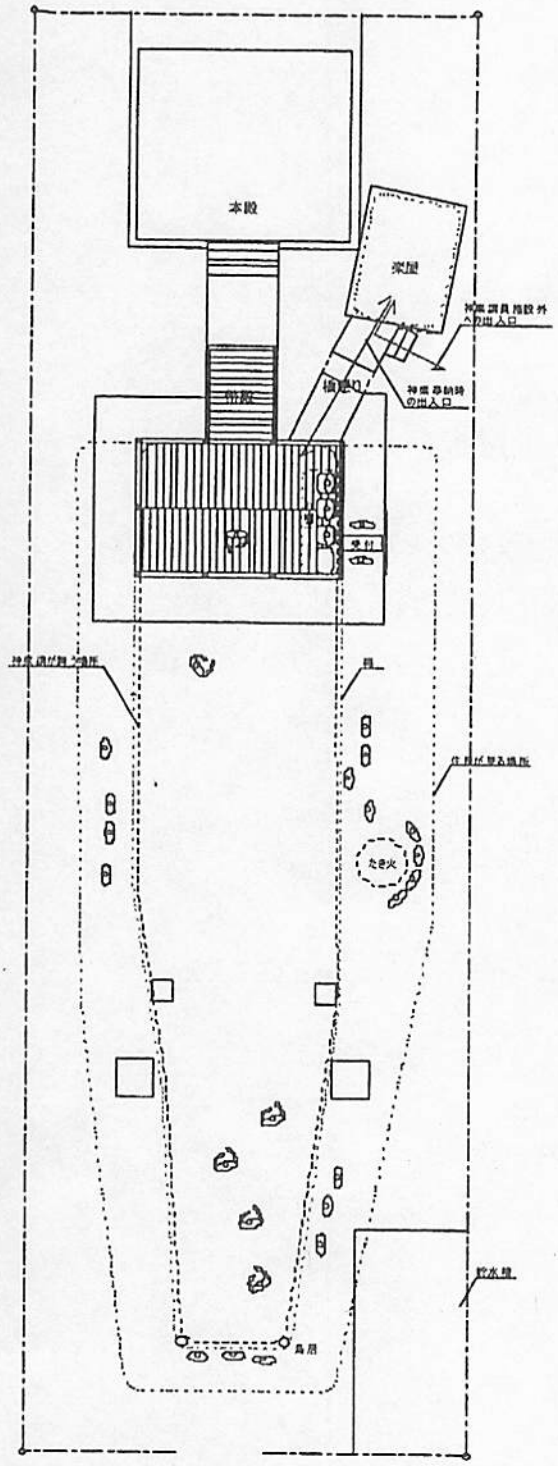


図2-1. 神楽奉納時の使われかた

No.30

*1 西日本工業大学研究生 Reseacher.,NishinipponInstitutcofTechnology,
*2 西日本工業大学助教授・博士（学術） Assoc.Prof.,NishinipponInstitute ofTechnology,Ph.D.
*3 福岡大学教授・工博 Prof.,FukuokaUniversity,Dr.Eng.
*4 東和大学教授・工修 Prof.,TohwaUniversity,M..Eng.

NII-Electronic Library Service

日本建築学会大会学術講演梗概集
（北海道） 2004年8月

福岡県京築地区の神楽舞台の研究

その3　神楽舞台の平面構成

正会員　○岡田　知子*1
同　　柴田　加奈子*2
同　　井上　英孝*3
同　　河野　泰治*4

神楽舞台　平面構成　面積　柱間　福岡県　京築地区

はじめに

本稿は前稿に続き、神楽舞台の平面構成について、豊前市、豊津町、苅田町の比較を通してその特徴を考察する。

1．神楽舞台の平面構成

神楽舞台の面積、間口奥行の寸法、間数について豊前市、豊津町、苅田町を比較してみる。前稿で分類した図1-3のように神楽舞台全体のうち楽屋が拝殿の一部を占める付属型のタイプがあるのでここでは神楽舞台のみと楽屋を含む神楽舞台全体に分けて比較分析している。なお、別棟型と楽屋なしのタイプは舞台のみと舞台全体が同じになる。

1.1. 舞台面積

図3-1は神楽舞台全体、図3-2は神楽舞台のみの面積の割合を比較したものである。舞台全体では豊前は20～40㎡台に84%、豊津も20～40㎡台に90%、苅田は30～50㎡台に68%が集中している。豊前は楽屋を有している型が多いが豊津と苅田は楽屋なしの型が多いため舞台のみの面積を比較すると、豊前は10～20㎡台に79%が、豊津は20～40㎡台に84%、苅田では30～40㎡台に58%が集中しており、豊前が豊津や苅田に比べて10～20㎡程度小さい。それぞれの面積を平均値でみても苅田は豊津より若干大きい程度でそれほど差はないが、豊前は苅田や豊津に比べて15㎡程小さい。

1.2. 間口と奥行の大きさ

舞台の間口と奥行は本殿に対しての関係で、本殿に向かって正面側を間口とする。図3-3、3-4は舞台全体と舞台のみの別に間口と奥行の大きさの関係をグラフ化したものである。

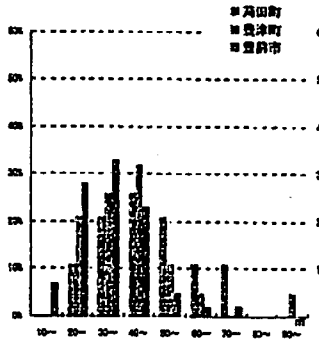


図3-1舞台全体の面積別割合

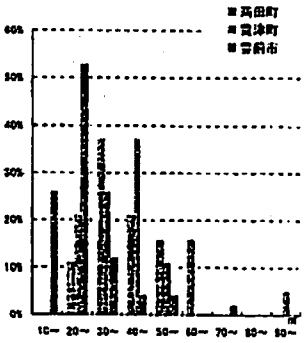


図3-2.舞台のみの面積別割合

まずそれぞれ間口が奥行に対して大きいものが主流であることがわかる。また、奥行が4000～5000mm前後に集中しているのに対して間口は4000～12000mmと散らばっており、幅がある。豊前より豊津や苅田の方が全体として間口は大きく、規模の差異に反映している。さらに詳細にみると、間口と奥行が同寸法のものが11件みられるが、その全てが豊前の舞台のみの場合で配置形式は楽屋付属型である。奥行が間口より大きいものは豊前で6件、苅田で1件みられ、いずれも神楽殿式か楽屋別棟型である。

舞台のみのについて詳しくみると、豊前の場合、奥行が4000～5000mm前後に9割近くが集中している。特に3960（13尺）が7件、その前後の±20を合わせると14件となり、1/4にあたる。また、間口は8割近くが4000～6000mm前後である。豊津は奥行が4000～5000mm前後に8割、間口6000～10000に9割が集中している。苅田でも奥行4000～5000mm前後に8割、間口7000～10000mm前後に8割近くが集中している。

1.3. 間口と奥行の柱間数

表3-2の各表は間口と奥行の柱間数の組み合わせを舞台全体と舞台のみの別にそれぞれ示したものである。なお、表中の丸の大きさはその割合の大きさを示している。

豊前の舞台のみをみると間口3間、奥行2間が5割を占め、最も多い組み合わせになる。舞台全体でみると楽屋付属型のタイプが 65 %を占めるため間口4間以上のものが多くなるが、奥行は7割が2間である。一方、豊津と苅田は楽屋が付属しているタイプが少ないため舞台のみと舞台全体の傾向はほぼ同じで、豊津は間口3間、奥行2間、苅田は間口3間、奥行3間の組み合わせが最も多く、それぞれ6割近くを占める。

1.4. 大床（濡れ縁）の有無

豊前で大床のある舞台は 30 件で半数以上を占める。それに対して苅田では大床のあるものは 1 件、豊津では 2 件のみである。

1.5. 向拝の有無

豊前では向拝のあるタイプは 57 件中 10 件のみだが、苅田は 19 件中 17 件でほとんどの舞台に向拝がある。豊津は 19 件中 13 件で、向拝のあるタイプは 7 割である。

NII Electronic Library Service

以上、神楽舞台についてその特徴をまとめると以下のようになる。

・豊前、豊津、苅田とも奥行より間口の大きいものが主流である。

・豊前と豊津は間口３間奥行２間、苅田は間口３間奥行３間がそれぞれ最も多い。

・奥行は豊前、豊津、苅田とも 4000 ～ 5000 ㎜だが、間口は 4000 ～ 10000 ㎜と幅があり、豊前、豊津、苅田の順に大きくなる。

・面積は苅田や豊津の方が豊前より 10 ～ 20 ㎡程度大きい。

・豊前は楽屋を有しているが、苅田や豊津では楽屋のないものが多い。

以上の分析をふまえ典型的な平面型の事例を示したものが図 3-5、3-6、3-7 である。図 3-5 の豊前の事例は間口３間奥行２間の神楽舞台に楽屋が付属している。図 3-6 の豊津の事例は楽屋なし間口３間奥行２間大床のないタイプである。図 3-7 の苅田の事例は豊津と類似しているが、間口３間奥行３間である。

おわりに

本研究は京築地区における神楽舞台の特徴を明らかにすることを目的としているが、今回は便宜的にこの地区の南部に位置する豊前市、ほぼ中央の豊津町、北部の苅田町の３つの市町を取り出して神楽舞台の平面についてその面積、間口奥行、柱間数などから分析的に考察し、以下のことがわかった。

・豊前市、豊津町、苅田町のそれぞれの行政区の中においても舞台平面の形式と構成は多様である。

・しかしながら共通点も見いだされる。一方で豊前市と苅田町にはいくつかの差異があり、特色がある。豊津町はその両方の特色を受け継いでいる。

・京築地区の神楽舞台はそれぞれの領域ごとに特色があり一様ではないと予想される。今後、京築を中心に事例を増やしその特徴を明らかにしたい。

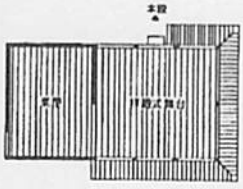


図3-5豊前の典型的平面図

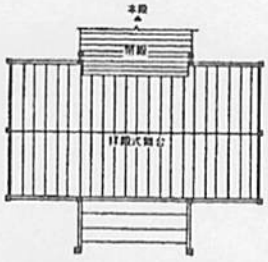


図3-6豊津の典型的平面図

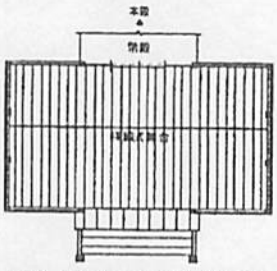


図3-7苅田の典型的平面図

表3-1　神楽舞台の間口と奥行の関係

	豊前		豊津		苅田	
	舞台全体	舞台のみ	舞台全体	舞台のみ	舞台全体	舞台のみ
間口＞奥行	51	43	19	19	18	18
間口＝奥行	0	11	0	0	0	0
間口＜奥行	6	3	0	0	1	1
計	57	57	19	19	19	19

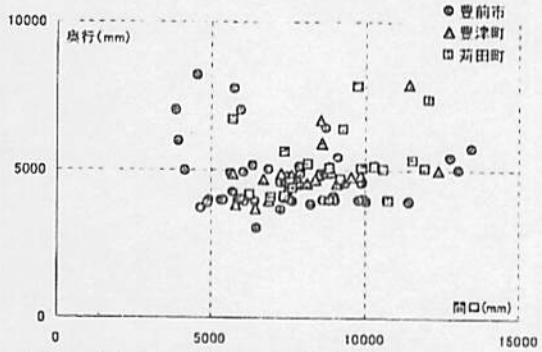


図3-3　間口と奥行きの相関（神楽舞台全体）

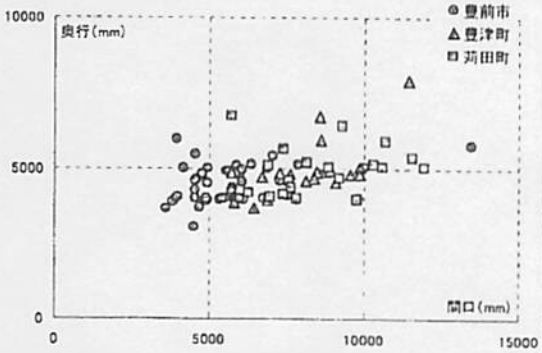


図3-4　間口と奥行きの相関（神楽舞台のみ）

表3-2間口奥行柱間数

豊前・神楽舞台全体

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1	1		2		2			5
2	1		17	11	10	1		40
3			4	4			1	9
4		1	2					3
	2	1	25	15	12	1	1	

豊前・神楽舞台のみ

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1		2	3					5
2		3	11	28	2			45
3			6				1	7
4								
		5	14	35	2		1	

豊津・神楽舞台全体

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1								
2				1				13
3			3		1			4
4					2			2
			15	1	3			

豊津・神楽舞台のみ

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1								
2								13
3			3		1			4
4					2			2
			16		3			

苅田・神楽舞台全体

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1								
2			3					3
3			11	2	1	1		15
4			1					1
			15	2	1	1		

苅田・神楽舞台のみ

奥行＼間口	1	2	3	4	5	6	7	
1								
2			4					4
3		1	11	1	2			15
4								
		1	15	1	2			

*1 西日本工業大学助教授・博士（学術）　Assoc. Prof.,Nishinippon Institute of Technology,Ph.D.
*2 西日本工業大学研究生　Reseacher.,Nishinippon Institute of Technology,
*3 福岡大学教授・工博　Prof.,Fukuoka University,Dr.Eng.
*4 東和大学教授・工修　Prof.,Tohwa University,M..Eng.

NII Electronic Library Service

日本建築学会大会学術講演梗概集
（近畿） 2005年 9 月

京築地区南部の神楽舞台の特徴　その１　太平村について

－福岡県京築地区の神楽舞台の研究　その４－

正会員　○ 井上英孝 *1
同　河野泰治 *2
同　岡田知子 *3
同　柴田加奈子 *4

神楽舞台　拝殿　神楽殿　神楽講　豊前岩戸神楽

はじめに　研究の目的と背景

福岡県東部に位置する京築地区（2市7町2村）に現存する神楽舞台の調査結果について、既に豊前市・豊津町・苅田町の３地域について前稿で報告したところである（(1)(2)(3)）。本報告と続報では京築地区最南部に位置する大平村及び吉富町の調査結果を中心に（図-1）、地区内の神楽舞台の建築的な形態及び特徴を明らかにすることを目的とする。

１．前稿の概要

舞台の配置形式を分析するにあたっては（図-2）に示す類型化を図った。即ち、神楽舞台を「拝殿式」と「神楽殿式」に大別し、更に拝殿式を「本殿・拝殿連結型」と「本殿・拝殿別棟型」に２分している。また、楽屋は舞台との関係から「付属型」、「別棟型」、「楽屋なし」、の３つに分類している（図-3　に楽屋別棟型・拝殿式舞台例を示す）。

舞台の建築的形態・規模等は南部（豊前市）、中央部（豊津町）、北部（苅田町）の３地域において以下のような差異があることが明らかになった。

１．１．建築的特徴

・舞台の主な配置形式

豊前市：　本殿・拝殿別棟型、楽屋付属型

豊津町・苅田町：　本殿・拝殿連結型、楽屋なし

・舞台面積

南部の豊前市は中央部及び北部の豊津町・苅田町に比べて平均で 15 ㎡程小さい。

・舞台の主な（間口×奥行き）の柱間数

柱間数は概ね舞台面積に比例して、豊前市・豊津町は（3×2）、苅田町は（3×3）が多い。

２．大平村の神楽舞台の特徴

太平村は京築地区の最南端に位置し、南は大分県に接する。地域面積は 49k ㎡、人口約 0.4 万人であり、活動中の神楽講は３講である。

２．１．配置形式

調査対象舞台数は 18 棟である。

舞台形式は「B. 本殿・拝殿別棟型が」半数（9 棟）を占めて最も多く、残りは「A. 本殿・拝殿連結型」（5 棟）と「C. 神楽殿式」（4 棟）である。神楽形式は楽屋がある舞台が 15 棟と全体の 83%を占め、「1. 付属型」が 8 棟、「2. 別棟型」が 7 棟でほぼ同数である。

舞台形式と楽屋形式の組み合わせでは、「(B-2) 本殿・拝殿別棟型、楽屋別棟型」が多いが他の形式も一定数みられ多様に分布していることがうかがえる（図-4、5）。

２．２．舞台面積（舞台のみ）

面積の算定にあたっては、楽屋を除いた神楽奉納時に使用される空間のみを対象とする。30 ㎡未満の小面積の舞台が 13 棟あり全体の 73%を占めて最も多く、なかでも他地域には稀少な 20 ㎡未満の舞台が 7 棟存在する。舞台の平均面積は 24.49 ㎡である（図-6）。

２．３．（間口×奥行）の柱間数（舞台のみ）

間口 1 間（1×1、1×2）の舞台が 8 棟存在し最も多いが、間口 2 間（2×1、2×2）を合わせると 12 棟で全体の 67%を占める。舞台の小規模化に比例して、柱間数も少ない範囲に偏在している（図-7）。

２．４．楽屋形式と規模

面積の算定にあたっては、楽屋がない舞台 3 棟、及び公民館等との併用で楽屋空間が確定困難なもの 3 棟を除いた 12 棟を対象とした。その内訳は「1. 付属型」が 6 棟、「2. 別棟型」が 6 棟である。面積分布は付属型が 5 ～ 15 ㎡に 4 棟、別棟型が 10 ～ 15 ㎡に 5 棟存在し、各々過半を占めている（表-1）。

楽屋の中には暖をとるための炉をきってあるものが 5 棟あり、そのうちの 4 棟は別棟型である。これは住民の集会の場として併用されていたものと推測される。

３．京築地区の神楽舞台の建築的特徴

前稿の 3 地域（豊前市、豊津町、苅田町）に同地区の最

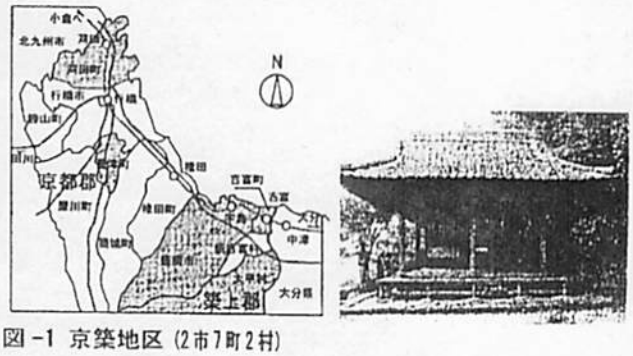


図-1 京築地区（2市7町2村）

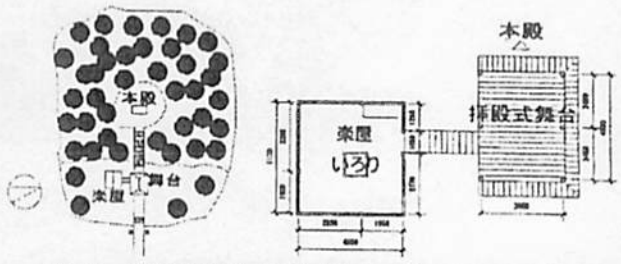


図-3　楽屋別棟型・拝殿式舞台（大平村、貴船神社）

A Study on Kagura-stages in southern area of Keichiku　Part 1　An Outline of Kagura-stages in Taihei

INOUE Hidetaka, KAWANO Yasuharu, OKADA Tomoko, SHIBATA Kanako

NII Electronic Library Service

南部に位置する大平村を加え、京築地区の神楽舞台の建築的特徴について考察する。なお、調査は悉皆調査を基本とし、4地域の調査対象舞台数は合計で113棟である。

3．1．舞台の配置形式

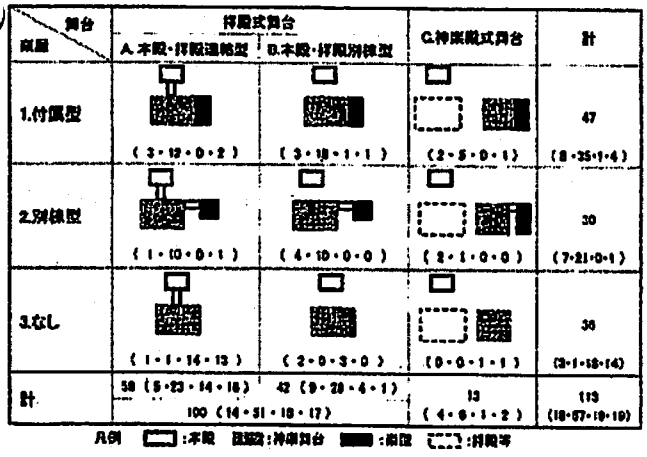
・舞台形式は拝殿式舞台が100棟あり全体の88%を占めて圧倒的に多い。また、大平村の神楽殿式舞台の比率が他の3地域より若干高いものの、地理的に大きな差異は認められないことから、この地区の舞台形式は拝殿式舞台が主流といえる。北部の苅田町では1例を除いて「A. 本殿・拝殿連結型」に集中し、中央部の豊津町ではこの集中度は低下している。南部の豊前市では「B. 本殿・拝殿別棟型」が増加して約半数を占めて舞台形式の多様化がみられ、大平村に於いては「B. 本殿・拝殿別棟型」が半数存在するが、「C. 神楽殿式舞台」の比率も増加し、多様化が更に顕著になっている。

・楽屋形式も全く異なり、苅田町及び豊津市では楽屋がない舞台が大勢を占めているのに対し、豊前市及び大平村では楽屋がある舞台が大勢を占めている。その内訳は豊前市では「1. 付属型」が多く、大平村では「2. 別棟型」の比率が増加して「1. 付属型」とほぼ同数になっている。

楽屋を別棟型にすることにより、舞台は三方もしくは四方開放が可能となり、伝統芸能である神楽奉納の場としてより効率的かつ効果的になる。また、別棟型の楽屋はその位置・形状・面積の自由度が増し、楽屋機能を更に充実することが可能となる。大平村に於いては楽屋が別棟型へとより一層分化が進んだと推察される。

大平村における楽屋面積の平均は別棟型（17.5 ㎡）が付属型（14.01 ㎡）より約3.5 ㎡大きい。逆に、舞台面積の平均は楽屋別棟型（21.06 ㎡）が付属型（28.77 ㎡）より約7.7 ㎡小さい。また、間口の柱間数も1間のものが楽屋別棟型の舞台に集中している（6棟のうち5棟）。

以上より、大平村の舞台が他地域より小規模であるのは、楽屋がより規模が大きい別棟型へと形態分化したことが一因と推測できる。



図－2 神楽舞台の配置形式と舞台数（大平村・豊前市・豊津町・苅田町）

3．2．舞台面積及び柱間数

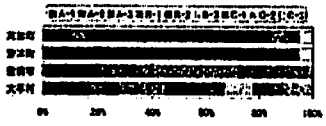
・北部の苅田町、中央部の豊津町は40 ㎡以上の舞台数の割合が過半数を超えており、一方、南部の豊前市、大平村は30 ㎡未満が70%以上を占めているが、特に大平村では20 ㎡未満の小舞台の比率が高い。面積の平均値でも苅田町・豊津町より15 ㎡程度小さい。舞台面積は北部及び中央部が大きく南部は小さくなることがうかがえる。

・（間口×奥行）の柱間数は舞台の面積に基本的に比例すると思われ、舞台面積が大きい北部は柱間数は多く、面積が小さい南部は少ない傾向が見られる。苅田町は（3×3）、豊津町は（3×2）、豊前市は比率は低下するが（3×2）が多く、大平村は（2×2）以下が大勢を占めており、特に間口1間（1×1、1×2）の比率が高い。

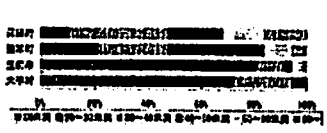
以上、京築地区の南北にわたる4地域において、本殿と拝殿との異なる接続方式の分布状況、舞台面積、及び楽屋空間の分化程度、等に顕著な相違があることが明らかになった。その背景は今後の課題である。

まとめ

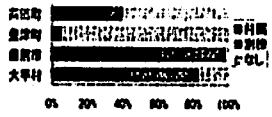
前稿の豊前市、豊津町、苅田町に最南端の大平村を加えて、福岡県京築地区における神楽舞台について概略を示した。京築地区は「豊前岩戸神楽」の地区とされているが、舞台の配置形式・規模等に関して同地区の北部、中央部及び南部の3地域では明らかな差異が認められる。今後は未調査の7市町村についても調査を行い、同地区全体の神楽舞台の特徴を明らかにしたい。なお、調査には元福岡大学生の橋本博文・於保達也両氏の協力を得た。謝して記す。



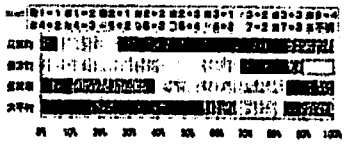
図－4 舞台配置形式



図－6 舞台面積



図－5 楽屋形式



図－7 間口×奥行

舞台面積(㎡)	0～5	5～10	10～15	15～20	20～25	25～30	計(棟)	平均面積(㎡)
付属型（棟）	0	1	3	1	0	1	6	14.1
別棟型（棟）	0	0	2	3	1	0	6	17.51
計(棟)	0	1	5	4	1	1	12	

表－1 楽屋面積

注

1) 井上英孝、河野泰治、岡田知子、柴田加奈子、「福岡県京築地区における神楽舞台の研究　その1　神楽舞台の概要」、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2、p537-538、2004.8

2) 柴田加奈子、岡田知子、井上英孝、河野泰治、「福岡県京築地区における神楽舞台の研究　その2　神楽舞台と神楽奉納」、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2、p539-540、2004.8

3) 岡田知子、柴田加奈子、井上英孝、河野泰治、「福岡県京築地区における神楽舞台の研究　その3　神楽舞台の平面構成」、日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2、p541-542、2004.8

*1　東和大学　教授・工修
*2　福岡大学　教授・工博
*3　西日本工業大学　助教授・博士（学術）
*4　同　研究生

*1 Prof., Tohwa University, Ma. Eng
*2 Prof., Fukuoka University, Dr. Eng
*3 Assoc. Prof., Nishinippon Institute of Technology, Ph. D.
*4 Researcher, Nishinippon Institute of Technology

NII Electronic Library Service

日本建築学会大会学術講演梗概集
（近畿） 2005年 9 月

京築地区南部の神楽舞台の特徴　その２ 吉富町について

－福岡県京築地区の神楽舞台の研究　その５－

正会員　○ 柴田　加奈子*1
同　　岡田　知子*2
同　　井上　英孝*3
同　　河野　泰治*4

神楽舞台　　拝殿式舞台　　仮設舞台　　神楽奉納

はじめに

前報で述べたように京築地区の神楽舞台はそのほとんどが拝殿で神楽奉納が行われる拝殿式舞台である。舞台の面積、柱間数、楽屋の有無や形式などについてある領域ごとに特徴をみると、京築地区の北部、中央部は舞台面積が大きく、柱間数も多い。それに対して、南部は舞台面積が小さく、柱間数も少ないが、北部、中央部では見られなかった楽屋が存在する、などの傾向があることがわかってきた。

これまでほとんどの集落に集落神社があり、そこに舞台が存在していた。しかし、京築南部に位置し、大分県との県境にある吉富町では境内に舞台を持たない神社が約半数を占める。そのような舞台を持たない集落でも仮設舞台で神楽奉納が行われているということが調査で明らかになった。そこで、本報は吉富町の神楽舞台の特徴と仮設舞台での神楽奉納を報告する。

１．調査の方法・対象地区

地図と既存資料により、吉富町全ての神楽舞台の実測調査を行うとともに、奉納時の観察調査を実施した。

図 2-1 は吉富町の神楽奉納の舞台を分布を示したものである。集落神社にある舞台をもつ集落は 8 件、集落神社に舞台を持たない集落は 5 件、集落神社を持たない集落が 4 件である。古表八幡神社は吉富全ての神社の神主なので、集落神社とは区別した。

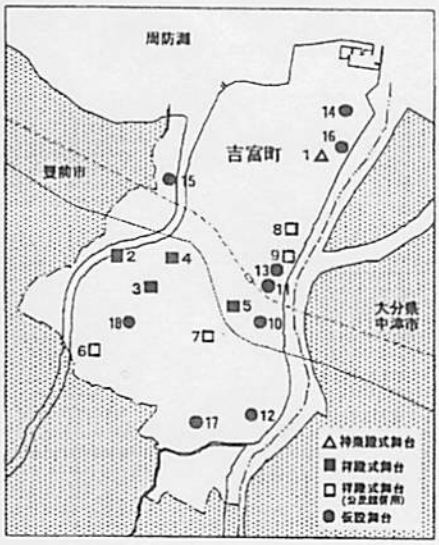


図2-1 神楽舞台分布図

1.古表八幡神社
2.土屋(宮神社)
3.鮎瀬 (五社神社)
4.諸江 (八坂神社)
5.和田 (春日神社)
6.別府 (貴船神社)
7.今吉 (吉田神社)
8.小犬丸下 (諏訪神社)
9.小犬丸上 (宇賀神社)
10.広津上 (仮設舞台)
11.広津下 (仮設舞台)
12.幸子古 (仮設舞台)
13.昭和 (仮設舞台)
14.高浜 (仮設舞台)
15.界木 (仮設舞台)
16.高鶴島 (仮設舞台)
17.幸子上 (仮設舞台)
18.椎生 (仮設舞台)

２．神楽舞台・楽屋

2.1.拝殿式神楽舞台の形状

前報で述べたような柱間に建具や壁もない開放的な拝殿式舞台(図 2-2)は 4 件のみである。事比羅神社を除く３件については舞台面積 24 ㎡程度、間数は間口 3 間奥行 2 間、腰壁も無く開放されており、形状はこれまでのものと同様である。楽屋は別棟型で橋掛りはないが奉納時に架けられるように施されている。

残り 4 件は拝殿を増改築し、現在、集落の公民館として利用され、舞台としても使われている。(図 2-3) 奉納時に使われる面積は 20 ～ 40 ㎡程度で様々である。平時はアルミの雨戸で閉鎖されているが、図 2-3 に示すように奉納時は本殿方向と拝殿の正面側の舞台間口全てが開放される。楽屋については宇賀貴船神社の別棟型を除いて 3 件は付属型である。拝殿が公民館化していく中で増築された部分を楽屋としたり、広めの集会室を幕で隔てて楽屋にしたり、建具などで区切られている場合は取り外され、舞台の様子がうかがえるような場所に設置するケースも見られた。

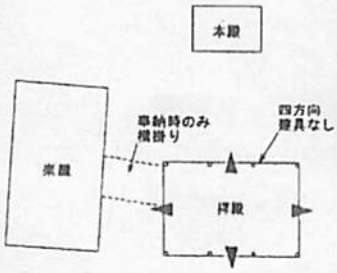


図2-2　拝殿式舞台
［常時四方開放］

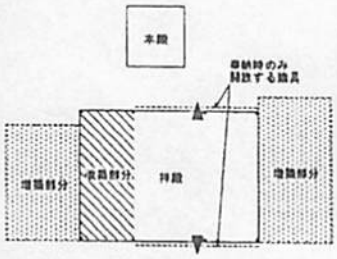


図2-3　拝殿式舞台
［奉納時のみ二方開放］

2.2.仮設神楽舞台の形状

集落神社を持つが拝殿（神楽舞台）はない集落や集落神社がない集落も神楽奉納をする。その場合は駐車場や空き地を利用し、住民が前日から仮設舞台を設営し、御輿を本殿の代わりとし、その前で行う。

A Study on Kagura-Stages in Southern area of Keichiku
Part 2　Kagura-Stages and Kagura Dedicatory in Yoshitomi
SHIBATA Kanako, OKADA Tomoko, INOUE Hidetaka, KAWANO Yasuharu

当日の早朝に神入れ（神移し）された御輿が奉納場所へ運ばれ鎮座する。舞台はレジャーシートの上にゴザやカーペットを敷いたり、タタミを置くだけで床高はない。面積は 16 ～ 80 ㎡と幅があるが、舞台の周囲に囃子方や見物人も座るので全てが舞うためだけの広さではない。御輿と舞台の周囲には４～５ｍの高さの笹竹を四方に立て、注連縄でつなぐ。雨天時はテントなどで屋根と周囲を覆ったり、御輿と共に公民館に移動して奉納される。楽屋は舞台横にテントを張ったり、倉庫や駐車場を使用する。橋掛りはゴザやタタミを敷いて舞台とつなぐ。

３．神楽奉納

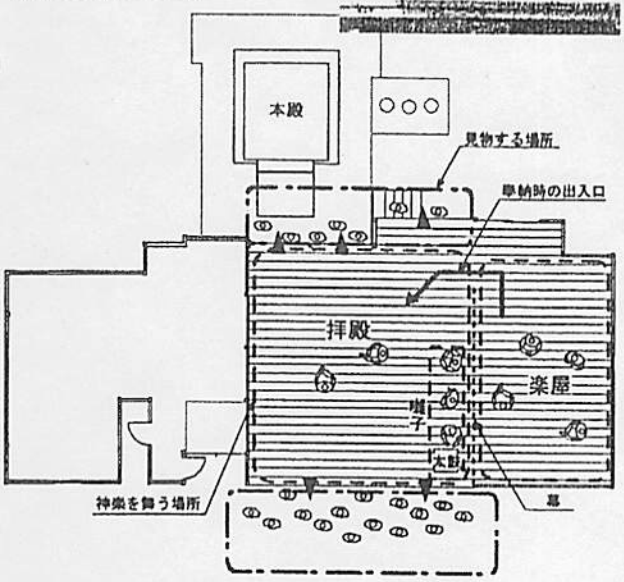
3.1.奉納の時期・内容

吉富町での神楽奉納は古表八幡神社の１月を除く全ての集落で 10 月初旬から中旬にかけて行われている。

大半の集落が前日から集落内に笹竹や幟を立てたり、舞台の準備をする。当日は早朝から御輿に神入れし、祭典の後神楽奉納が始まる。当日の午後は「神迎」「道神楽」と呼ばれる演目が始まり、御輿と共に舞方、囃子方、見物人も一緒に移動し、集落内の道路や庭先で奉納する。夕食後は舞台に戻り、奉納の多い集落では翌日の未明まで奉納される。仮設舞台での奉納の場合は終了後、御輿の神移しを行った後直会を行う。

写真．舞台以外での奉納

図2-4
拝殿式舞台での奉納



3.2.神楽奉納の様子

図 2-4 公民館化された拝殿式舞台での奉納時の様子を示したものである。集会室を幕で仕切り、舞台と楽屋に分けて使っている。見物人は舞台正面と本殿方向は開放されているのでその場所から見物する。

仮設舞台での奉納の場合は図 2-5 のように御輿の前以外は舞方と同じ舞台上に座り見物することが出来る。囃子はどの場合においても舞方が囃子方も勤めているので、連絡のしやすい楽屋近くに着座している。

以上、吉富町の特徴をまとめると以下のようになる。

・拝殿式舞台がある集落は全体の半数であり、舞台のない集落は仮設舞台で奉納する。

・開放的な拝殿式舞台と公民館化された拝殿式舞台が存在する。

・仮設舞台はそれぞれの敷地により大きさは異なるが、舞台の仕様はほぼ同じである。

・全集落が神楽を奉納し、内容も類似している。

おわりに

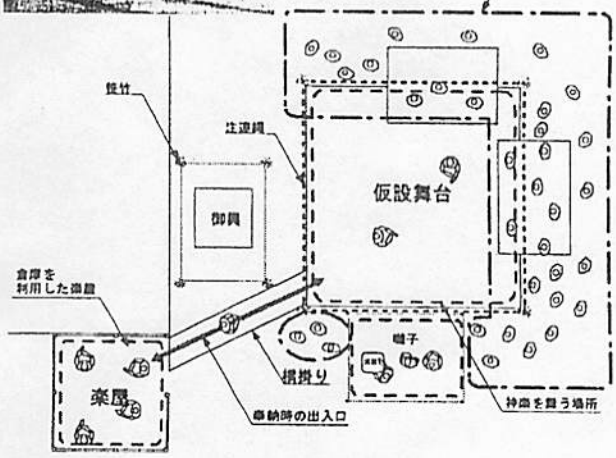
京築地区南部（太平・吉富）では以下のことが明らかになった。

・開放的な拝殿式舞台の舞台面積は平均 24 ㎡前後で北部、中央部に比べて規模が小さい。規模に比例して柱間数も少ない。太平村では間口１間、20 ㎡未満のものも少なくない。

・京築北部、中央部ではほとんど見られない楽屋が、南部には多く存在し、楽屋面積の規模も大きい。

これまで常設舞台の実測調査を行ってきたが、今回の調査では仮設舞台での奉納も明らかになった。今後は仮設舞台の有無を含めヒアリング調査を行い、京築地区の特徴を明らかにしたい。

図2-5
仮設舞台での奉納



*1 西日本工業大学研究生　Rescacher.,Nishinippon Institute of Technology,
*2 西日本工業大学助教授・博士（学術）　Assoc. Prof.,Nishinippon Institute of Technology,Ph.D.
*3 福岡大学教授・工博　Prof.,Fukuoka University,Dr.Eng.
*4 東和大学教授・工修　Prof.,Tohwa University,M..Eng.

NII Electronic Library Service

日本建築学会大会学術講演梗概集
（関東） 2006年 9 月

京築地区の神楽奉納の特徴

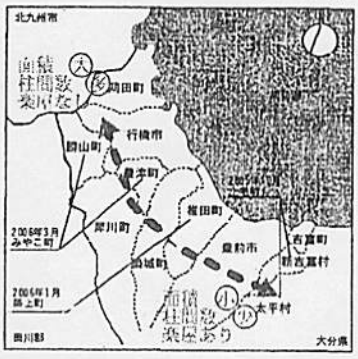
－福岡県京築地区の神楽舞台の研究　その６－

正会員　○柴田　加奈子*1
同　　岡田　知子*2
同　　井上　英孝*3
同　　河野　泰治*4

神楽講　　神楽奉納　　京築地区　　豊前市

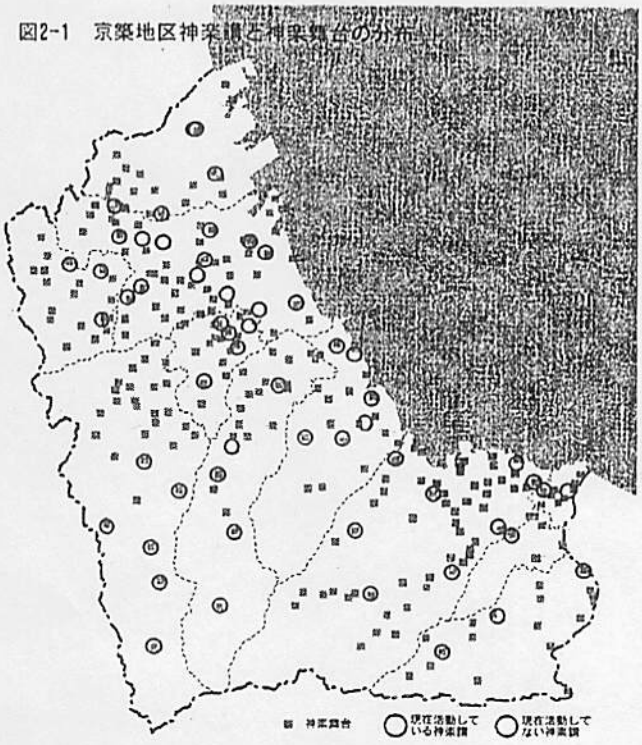
はじめに

本研究は福岡県京築地区の神楽舞台の特徴を調査してきた。現在 200 棟以上の神楽舞台を把握しているがそのほとんどが集落神社の拝殿式舞台である。舞台形状（面積、柱間数）、楽屋の有無や形式の特徴は、京築地区の北部と中央部は舞台面積が大きく、柱間数も多いが、南部は舞台面積が小さく、柱間数も少ない。また北部と中央部では見られなかった楽屋が存在するなど、京築の神楽舞台の特徴が次第にあきらかになってきた。



そこで本報では京築地区の神楽奉納の特徴と、6 つの神楽講が活動している豊前市の神楽奉納の特徴について報告する。

図2-1　京築地区神楽講と神楽舞台の分布



１．調査の方法・対象地区

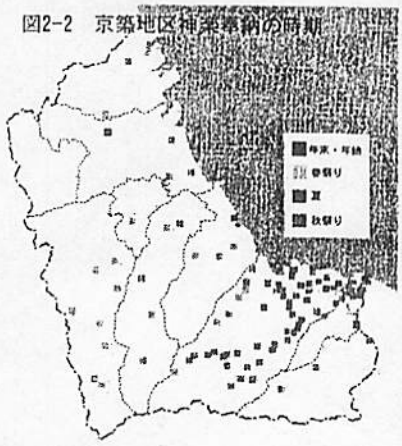
これまで地図と既存資料により、京築地区の神楽舞台の実測調査を行うとともに、ヒアリングから神楽奉納の有無と観察調査を実施した。

２．京築地区の神楽奉納

2.1. 京築地区の神楽講

図 2-1 に示すように京築地区には神楽講がほぼ全域に存在していた。しかし、北部（苅田町、行橋市、旧勝山町）では現在活動している神楽講は近年復活したものや新たに組織された講、保存会を含めてわずか６つである。一方、中央部（旧犀川町、旧豊津町、旧築城町、旧椎田町）、南部（豊前市、吉富町、旧新吉富村、旧太平村）ではほとんどの神楽講が今なお活動している。地域ごとに特徴を述べると、北部は近接に神楽講が存在していた。しかし昭和初期に途絶えたり、昭和 50 年代に後継者不足により人数が足らず活動を休止している。中央部では以前よりは減ってきたものの、現在でも地域の小学生に教え、後継者を育てて維持に努めている。南部は神楽講の活動が盛んで、神楽講を持たない集落でも、近隣の神楽講を雇い、奉納している。

図2-2　京築地区神楽奉納の時期



2.2. 京築地区の神楽奉納の時期

京築地区では春、秋に神幸（祭）が行われている。神楽はその祭りのなかで奉納されている。奉納時期は図 2-2 で示すように主に秋季の神幸で奉納をする南部と、春季に神楽奉納をしている中央部とに分かれる。南部は 9 ～ 12 月になると、あらゆる集落で神楽が奉納している。一方中央部は春季（4 ～ 5 月）を主に神楽奉納を行っている。

３．豊前市の神楽奉納

3.1. 豊前市の神楽講

次に京築地区でも最も神楽講が盛んに活動している

A Study on Kagura-Dedicatory in Keichiku
Part 6　A Study on Kagura-Stages in Keichiku, Fukuoka Prefecture
SHIBATA Kanako, OKADA Tomoko, INOUE Hidetaka, KAWANO Yasuharu

NII Electronic Library Service

豊前市についてみてみる。ここでは6つの神楽講、保存会が活動している。岩屋神楽を除く5つは明治初期に神楽講として成立し、戦争中は講員が減少や活動中止もあったが、戦後復興し、今に至っている。講員人数は13人から20人ぐらいで、地元の子供を加えると44人になる講もある。講員（舞方・囃子方）の構成は小学生から70歳代80歳代までが所属していて年齢層が広く、主に20歳から50歳の講員が中心に舞方を勤めている。講員は神楽講の所属している神社の氏子がほとんどである。

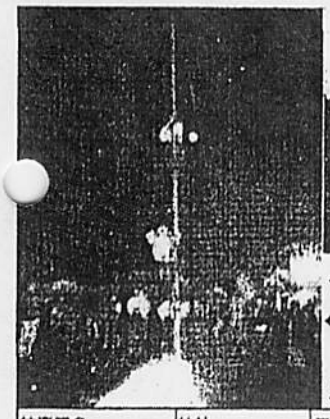
3.2. 豊前市の神楽奉納

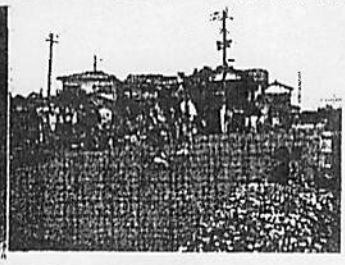
豊前市の神楽奉納の時期は主に秋季の神幸に奉納され、10 ～ 12 月の初旬まで各集落で奉納されている。各集落で平日休日を問わず、お祭りの日時が決まっていたが、近年では準備する人手や祭りの観客不足なども考えられ、週末に行うことが多くなってきている。奉納する時間は午前から夜中にかけて行われている集落もあれば、夕方からはじまり、午後 11 時前後に終わる集落もある。

奉納場所は主として各集落神社の拝殿だが、火や湯水を使う演目や湯木（湯鉾）という 10m 前後の柱を立て舞方が登って舞う演目などは境内で行われる。日中には集落内の道路や御旅所で行われる場合もある。拝殿を持たない神社でも仮設舞台を設営して奉納しており、豊前市内のほとんどの集落が神楽奉納をおこなっている。

図 3-1 は豊前市の神楽講別に奉納している集落神社を示したものである。各神楽講は所属している神社での奉納以外に、周辺の他の集落の秋祭りでの神楽奉納をする。神楽講の持たない集落では決まった神楽講を毎年雇ったり、隔年で神楽講を変えたりする。

図3-1 豊前市の神楽講の活動分布





↑写真1 道神楽の様子

←写真2 湯立神楽の様子

↓表 豊前市 神楽講一覧

神楽講名	神社	講員人数	講員年齢	講員住所	主な奉納場所 奉納日
中村神楽保存会 [明治13年ごろ発足]	角田八幡神社 (中村-小畑)	23名	小学生～高校生 20歳代～70歳代	豊前市中村	角田八幡神社秋祭り:11月第4日曜
大村神楽 [明治10～15年発足]	大富神社 四郎丸-小畑	15人	10歳代～80歳代	ほとんど大村	大富神社秋祭り:10月19日
黒土神楽講 [明治10年発足]	石清水八幡神社 (久路土-白旗鼻)	18人	19～72歳	豊前市鬼木	石清水八幡神社秋祭り:10月15日
山内神楽講 [明治10年発足]	噴吹八幡神社 (山内-田中)	44人	子供29人大人15人 3歳～60歳代 全て男	豊前市山内	噴吹八幡神社秋祭り:10月13日
岩屋神楽講 [昭和3年発足]	七社神社 (岩屋－中畑)	13人	高校生～70代 うち女性2人	だいたい岩屋	七社神社秋祭り:10月17日 国玉神社お田植え祭 3月29日
三毛門神楽 [明治初期10年ぐらい]	春日神社 三毛門-宮ノ本	14人	20代6人、40代3人 50代5人	だいたい三毛門	春日神社秋祭り:12月第1土曜

各神楽講の活動域を豊前市内に限ってみてみる。神楽講のある神社周辺を中心に、昭和 31 年の市町村合併以前の行政区の中で活動していることがわかる。

京築地区の神楽奉納の特徴をまとめると以下のようになる。

・京築地区の神楽講は全域に存在していたが、現在では北部は少なくなり、中央部と南部は盛んに活動を行っている。

・南部は神楽講のない集落神社でも奉納を行っている。

・奉納時期は豊前市の一部（角田地区）を除いて、南部は秋季の神幸に主に奉納されるが、中央部は春季の神幸に奉納している。

・豊前市ではほとんどの集落の秋祭りで神楽奉納を行い、各神楽講は所属している神社以外での奉納も行っている。

・神楽講の活動域はほぼ以前の行政区域内にある。

おわりに

今回は京築地区の中でも、神楽奉納が盛んな南部について報告した。しかし以前は北部にも神楽講が多く存在し活動していた。この地区の中で衰退したところと、今でも盛んなところがあるというように、神楽をめぐる状況が異なってきた。

今後はなぜ休止状態になっているのか、その要因をさぐりたい。

*1 西日本工業大学研究生 Reseacher.,Nishinippon Institute of Technology,
*2 西日本工業大学教授・博士（学術） Prof.,Nishinippon Institute of Technology,Ph.D.
*3 福岡大学教授・工博 Prof.,Fukuoka University,Dr.Eng.
*4 東和大学教授・工修 Prof.,Tohwa University,M..Eng.

NII Electronic Library Service